

ダイバーシティ / ワークプレイス研究の論点整理

——障害と共に働くこと——

新潟青陵大学 海老田大五朗

【1. 目的】

本研究の目的は、多様な人々が共に働くこと、つまりダイバーシティにおける共同作業に対して、エスノメソドロジー・会話分析によるワークプレイス研究がいかに貢献できるか、基礎的な考察をすることである。ワークプレイス研究とは、「仕事／労働の現場やそこでのコミュニケーションに焦点を当てたエスノグラフィーやフィールドワークを用いた研究」であり、情報テクノロジーによる共同作業研究から、人々が共に働く実践へと研究対象を広げてきた（水川ほか編 2017, Luff et al. 2000）。本研究では、ダイバーシティ／多様性の中でも、特に障害者との共同作業を焦点を当てると共に、より広い多様性についても視野に入れて考察をする。

【2. 方法】

本研究では、まず、これまでのワークプレイス研究で得られた知見を振り返ることで、そのいくつかの概念について検討をする。そして、障害者との共同作業に関連する (relevant)、現代社会の諸条件、例えば、障害者総合支援法に基づく相互行為上の配慮などとの接点について考慮しながら、ワークプレイス研究の概念についての貢献可能性について考察する。

【3. 結果】

エスノメソドロジーによるワークプレイス研究においては、共同作業におけるいくつかの視点を提供してきた。例えば、協調の中心やプランの状況的实践 (Suchman)、実践的マネジメント (Ikeya)、共同注視 (Goodwin, Mondada)、実践に埋め込まれた道具・メディア、共同作業のデザインなどである。これらのワークプレイス研究独自の展開のほか、カテゴリー使用の問題（障害者カテゴリーとその結合行為、成員カテゴリー装置など）、会話と相互行為上のテーマ（修復、参与枠組など）、知識の非対称性の問題などの研究が、障害者との共同作業に対して新たな視点を提供するものと考えられる。さらに、この研究は、現代社会において、障害者に対する支援テクノロジーを用いた共同作業、「合理的配慮」に関わる共同作業の相互行為上の課題などにも焦点を当てることが可能となる。

【4. 結論】

以上より、障害者が／と共に働くことに関して、ワークプレイス研究は、その独自の視点による概念をもとにした研究も可能であると共に、現代社会のテクノロジーや障害概念に関連する共同作業に対しても新たな視点をもたらす可能性を示すことができた。この研究はまた、外国人、宗教、LGBTQなどの多様性のもとのワークプレイス研究についても応用できると考えられる。

文献

水川喜文・秋谷直矩・五十嵐素子編, 2017, 『ワークプレイス・スタディーズ——はたらくことのエスノメソドロジー』ハーベスト社.

Luff, P. et al.(eds.), 2000, Workplace Studies, Cambridge University Press.

○本研究は JSPS 科研費 (19H01567)「ダイバーシティにおけるワークプレイス研究—多様性の中で、共に働くこと」(基盤研究 B, 代表・水川喜文) の助成を受けたものです。